

竹内 抱甕子（たけのうち・ほうようし）

1、プロフィール

旧派に始まり、日本派、自由律派と多彩な俳句歴を持ち、佐藤紅緑・荻原井泉水の句風を継承。前衛俳人でありながら連句・定型の他派にも関心を示して、広い趣味性に生きた。

<生没>

1881(明治14)年2月8日 ~ 1933(昭和8)年1月30日

<代表作>

『抱甕子遺稿』

<青森との関わり>

弘前市に生まれる。生涯実業に従いながら自作に精進した。節目ふしめの友人、肉親を詠んだ句が多い。

2、作家解説

俳人。明治14年弘前市土手町に生まれる。本名は運吉。24年大成尋常小学校から弘前高等小学校に入学する。28年から2年京都の老舗で見習修行の後帰郷、30年旧派俳句を始め、米山連、常盤軒、門派など多くの月並俳会で活躍する。39年新派俳会として渋茶会が創立されるとこれに参加、40年には従来からあった新派俳句会太平会との合同連座が催された。41年渋茶会から「渋茶」(春夏秋冬の4号で終刊)が創刊されるとその同人として参加、紅緑選によって、新派俳人として面目を一新し、旧派の号吐月・呉竹を改め抱甕子とした。しかし、紅緑と渋茶会の関係は、紅緑の散文への転換をもって、41年に終わりを告げた。40年河東碧梧桐が来るも新傾向の旗幟がいまだ明らかでなく大方の理解がえられなかった。碧梧桐の後輩荻原井泉水が大正元年来弘するに及んでその自由律の主張に動かされた弘前俳人たちは、中央で四分五裂した俳句革新の選択肢から最も先端の道を採用することになる。

その後数年間、自由律を目指しつつも、定型に近い句も作った。彼が自由律らしい闊達な境地に達したのは、弘前に井泉水傘下の層雲支社のできる大正6年の前年あたりからである。巧緻・柔軟な句風は同じ自由律でも、長律、短律交互に転換し次第に後者に赴いた。このように〈前衛〉にありながら、定型の太平会が復活するとそれにも投句したことも抱甕子の一面を物語る。遺稿集に連句 17 章があるように彼はそれを俳句の生命と考え、俳友と唱和しまた独吟し続けた。竹内竹童によれば、「層雲」の投句は大正 12、3 年の数回だけというのも意外であるが、他派俳誌にも学んだところにも現れているように、趣味は書画、骨とうにも及んだ。

昭和8年 52 歳の若さで急逝した翌年『抱甕子遺稿』が刊行されたが、その俳句は旧派・日本派・自由律・連句などと多彩であって、〈前衛〉にありながら伝統を保持した特異な存在だったといえる。

3、資料紹介

○『抱甕子遺稿』

図書

1932(昭和9)年2月 10 日

195mm × 135mm

昭和9年2月 10 日発行。編者は竹内助七(竹童)、発行人は竹内重夫。旧派、日本派、自由律の句 1000 句の他、17 章の連句、略歴、荻原井泉水の序、追悼句・詩、追悼文を収める。